

中央環境審議会 地球環境部会
気候変動に関する国際戦略専門委員会 第二次中間報告：
気候変動問題に関する今後の国際的な対応について（長期目標をめぐって）
のポイント

- 地球温暖化による気温上昇とその影響に関する科学的知見
 - 気温上昇幅 1℃：脆弱な生態系に対する影響が一部で顕在化
 - 気温上昇幅 2℃：2～3℃になると地球規模で悪影響が顕在化
2℃以下に抑制することは悪影響の未然防止になる
 - 気温上昇幅 3℃：3℃を超えると気候システムの安定性を保つレベルを超え、海洋深層循環の停止などが生じるおそれ

- 科学的知見を踏まえれば、気温上昇の抑制幅を 2℃とする考え方は、長期目標の現段階での検討の出発点となりうる。

- 長期目標の設定は、科学のみによって決定されるべきものではなく、今後、この 2℃を中心にして、国内での議論を進展させるとともに、国際社会の合意形成に我が国が主導的な役割を果たすことが期待される。

- 工業化(1850年頃)以降、全温室効果ガスの濃度は、280ppm から 359ppm に増加し、気温は約 0.6℃上昇。

- 全温室効果ガスで 550ppm に安定化させても、気温上昇幅が 2℃を越える確率は相当高い。2℃以下に抑制するためには、550ppm を十分に下回る水準に抑える必要がある。AIM モデルによる試算では 475ppm の水準が必要とされた。
また、2℃以下に抑制するためには、温室効果ガス排出量の大幅な削減を早期に実現することが必要。一例として、AIM モデルによる試算では、世界全体の全温室効果ガスの排出量を 1990 年に比べ 2020 年で 10%、2050 年に 50%、2100 年に 75%削減することが必要。

- 今後の検討課題
 - ・ 科学的知見の充実に対応した更なる検討
 - ・ 気候変動問題におけるリスク管理の手法開発
 - ・ 緊密一体化した世界経済の中での、気候変動による影響の解明